

山鹿素行先生序文

楠正成一卷之書序

身を立て、道を行い、後世に名を揚げ、もって父母を顕す（広く世間に知らしめる）ことが、「孝」の終である。終とは「孝」の道を全うすることを云うのである。「孝」はあらゆる行いの根本であって、未だかつて父母に「孝」であって君に「忠」ではなく、君に「忠」であって父母に「孝」ではない者は存在しなかった。たしかに「忠孝」に二つの途はなく、その徳は一つであろう。まさに「忠孝」こそ士が希求して励まねばならないところである。しかしながら、その実を踏み行い、全うして世に顕すことは難しく、独り楠公父子だけが万世に忠孝の鑑として、その徳を古今に貫徹したのである。さて、君に「忠」を致さんと欲する者は治世にあつて乱を忘れない。乱を忘れないということは、功を立てる「忠」の大いなるものであつて、兵学の勤めるべきところである。この書は楠公の遺訓であるとともに兵家の龜鑑（判断や行動の基準となるもの）であるから、忠孝に志す士は拳拳服膺（心にしっかりと留めて決して忘れない）して読まなければならない。これこそが身を立て名を揚げるための韜略（とつりやく）である。久しく我家の蔵の中にあつたけれども、忠孝は天下の達するべき道であり、楠公は万世の明鑑であることから、敢えてこれを秘とすることなく、ここに書物として出版して四方に達し、後の世を照らすであろうことを切に願う。それゆえ、謹んでこの言を序とするものである。

于（於）時

承應三歳甲午（西暦一六五四年）十一月既望

後学 山鹿甚五左衛門平貞直

韜〓つつむ、ゆぶくろ、ゆみぶくろ